

【田原市博物館 テーマ展】

文人画家が描く、めでたいもの

令和4年12月3日(土)
～令和5年2月5日(日)

新年を迎えるこの時期。渡辺華山をはじめ文人画家が描く、めでたいもの、縁起が良いものを紹介します。

展示室
特別展示室

指定	作者	作品名	制作年	材質	員数	法量(cm)	備考
市指	わたなべかざん 渡辺華山	ふうちくの ず 風竹之図	天保9(1838)年	絹本墨画	1幅	114.0×39.3	
市指	渡辺華山 渡辺小華	ふくろくじゆ ず 福祿寿図	江戸時代後期～明治時代	紙本淡彩	3幅	各114.0×27.1	
	渡辺華山	ぶかんぜんじき ござ 豊干禅師騎虎図	江戸時代後期	紙本墨画	1幅	130.7×57.3	高林コレクション
	たに ぶんちよう 谷 文晁	こうしゅうぼうがく ず 甲州望岳図	寛政12(1800)年	紙本墨画淡彩	1幅	43.4×86.9	高林コレクション
	ふくだほんこう 福田半香	ふうきもくれん ず 富貴木蓮図	江戸時代後期	絹本着色	1幅	105.9×41.7	
	おだ ほんせん 小田莆川	こうぼいめんおう ず 紅梅鴛鴦図	江戸時代後期	絹本着色	1幅	105.2×41.0	
	ひらいげんさい 平井頭斎	きよくじつほうおう ず 旭日鳳凰図	嘉永2(1849)年	絹本着色	1幅	139.6×56.2	
	おかもとしゅうき 岡本秋暉	しょうかく ず 松鶴図	安政3(1856)年	紙本墨画淡彩	1幅	130.5×49.8	
	岡本秋暉	かちょう りゅう ず 花鳥・龍図	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	3幅	96.8×25.5	
	わたなべしょうか 渡辺小華	きゅうせい ず 九清図	明治10(1877)年	絹本着色	1幅	128.3×55.2	
	渡辺小華	しき そうか ず びょうぶ 四季草花図屏風	明治17(1884)年	絹本墨画	六曲一双	各119.3×34.6	
	かねこきんりょう 金子金陵	てんこうぎょくと ず 天香玉兔図	江戸時代後期	絹本着色	1幅	93.8×32.5	
	のぐちゆうこく 野口幽谷	かいかくほんとう 海鶴蟠桃	明治22(1889)年	絹本着色	1幅	137.8×63.2	
	渡辺華山画	みつぐみさかずき 三組盃	江戸時代後期		3口	径7.5、8.7、9.7	下村観山旧蔵
	渡辺華山	ぼいか ず せんめん 梅果図扇面	天保8(1837)年	紙本淡彩	1扇	14.9×44.0	
	渡辺華山 立原杏所	しょうじゅかいせき ず かん 松寿介石図巻	天保4(1833)年	紙本墨画淡彩	1巻	33.2×144.0	
	渡辺如山	かき ず かん 花卉図巻	文政12(1829)年	紙本淡彩	1巻	26.8×350.0	

市指＝田原市指定文化財 表記のないものは全て当館所蔵

田原市博物館

<作者紹介>

渡辺華山 寛政5(1793)年～天保12(1841)年

渡辺定通の長男として、江戸に生まれました。はじめ平山文鏡に師事し、白川芝山、金子金陵、谷文晁らに絵を学びました。華山は写実的な描写にこだわりました。特に肖像画を得意とし、西洋の陰影法を巧みに使い、独自の画風を確立しました。また「一掃百態図」(当館蔵)など、当時の文化や風俗を伝える資料が残っています。

谷 文晁 宝暦13(1763)年～天保11(1840)年

田安家家臣で詩人でもあった谷麓谷の子として江戸に生まれました。はじめ加藤文麗、渡辺玄対に絵を学びました。寛政4(1792)年、田安家出身の白河藩主松平定信の近習となり、『集古十種』などを編纂しました。当時の画壇の重鎮として活躍し、渡辺華山をはじめ多くの弟子を輩出しました。

福田半香 文化元(1804)年～元治元(1864)年

遠江国見附(静岡県磐田市)で生まれました。はじめ掛川藩の絵師村松以弘、続いて勾田台嶺に絵を学びました。天保4(1833)年、田原に帰郷中の渡辺華山を訪ね、その後華山の弟子になります。半香は花鳥画も描きましたが、山水画を得意としました。

松林桂月 明治9(1876)年～昭和38(1963)年

山口県萩市に生まれました。明治26(1893)年に上京し、翌年、椿椿山を師とする野口幽谷の弟子になります。日本美術協会展や文展に出品し続け、南画界の重鎮と言われます。昭和19(1944)年、優秀な美術家へ与えられる帝室技芸員に任命され、昭和33(1958)年には文化勲章を受けました。

野口幽谷 文政8(1825)年～明治31(1898)年

大工の棟梁源四郎の次男として江戸に生まれました。嘉永3(1850)年、椿椿山に師事し、花鳥画を学びました。明治5(1872)年のウィーン万国博覧会や明治10(1877)年の第1回内国勸業博覧会に出品し、画技を認められました。明治23(1890)年、橋本雅邦らとともに帝室技芸員に任命されました。弟子に椿山の孫である椿二山や松林桂月などがいます。

小田莆川 文化2(1805)年～弘化3(1846)年

旗本戸川氏に仕える家の末子として生まれました。渡辺華山の弟子となり、兄弟子である椿椿山と深く交友しました。椿山から手ほどきを受けたため、莆川の花鳥画には椿山の影響が見られます。華山が蛮社の獄で捕らえられた際、椿山と共に華山救済のために奔走しました。

平井顕斎 享和2(1802)年～安政3(1856)年

遠江国川崎(現在の静岡県牧之原市)に生まれました。はじめ掛川藩御用絵師の村松以弘に、のち江戸に出て谷文晁、渡辺華山に師事しました。顕斎は華山の作品を丹念に模写し、山水画を最も得意としました。重要文化財の渡辺華山筆「芸妓図」(静嘉堂文庫美術館蔵)は顕斎へ贈られたものです。

岡本秋暉 文化4(1807)年～文久2(1862)年

彫金家石黒政美の次男として江戸に生まれました。江戸の町人の出身母方の姓を継ぎ、小田原藩主大久保家に仕えました。はじめ大西圭斎に師事しました。写実的な作品を描き、華やかな花鳥画を得意とし、「孔雀の秋暉」と称されるほどでした。

渡辺小華 天保6(1835)年～明治20(1887)年

渡辺華山の次男です。小華が7歳の時に、父である華山が亡くなりました。その後、椿椿山の画塾に入門し、花鳥画の技法を学びます。22歳の時、兄の立の死後、渡辺家の家督を継ぎ、30歳で田原藩の家老に就きました。明治維新後、内国勸業博覧会の出品や明治宮殿の杉戸絵など制作しました。

渡辺如山 文化13(1816)年～天保8(1837)年

渡辺華山の弟です。学問や書画に優れ、将来を期待されましたが、わずか21歳で亡くなりました。若くして亡くなったため、作品は多く残っていません。14歳から椿椿山に師事し、天保7(1836)年刊行の『江戸現在広益諸家人名録』に掲載され、名を馳せていたことが窺われます。

金子金陵 生年不詳～文化14(1817)年

旗本である大森勇三郎の家臣。絵を谷文晁に学んだとされ、沈南蘋風の花鳥画を得意としました。渡辺華山が書いた「退役願書稿」(当館蔵)によると、華山は白川芝山の画塾の授業料が払えず破門されます。そのため父の紹介により金陵の弟子となりました。華山、椿椿山の師として知られています。

立原杏所 天明5(1785)年～天保11(1840)年

水戸藩の儒学者立原翠軒の子として、水戸に生まれました。19歳で家督を継ぎ、有能な藩士として徳川斉昭の信任を得ていました。絵を林十江や谷文晁に学び、花鳥画や山水画に優れる一方で、重要文化財「葡萄図」のように大胆で奔放な筆致の作品も描きました。